

○坂梨二郎・上野育夫・¹⁾井手眞一
(熊本農研セ・¹⁾天草地域振興局)

【目的】小麦「チクゴイズミ」は、標準播種(11月下旬)より早い11月中旬に播種すると、成熟期が早まり梅雨前の5月内に収穫できるが、早播により子実タンパク質含有率が低下する傾向がある。この対策として、穂ばらみ期あるいは出穂後10日目の追肥が一般に普及しつつある。本研究では、タンパク質向上に有効な出穂前後の追肥技術に加え、出穂期の葉色に応じた施肥方法を明らかにする。

【材料及び方法】

農産園芸研究所水田(厚層腐植多湿黒ボク土)において前作-水稻跡に「チクゴイズミ」を供試した。播種期は、2003年、2004年、及び2005年とも慣行より15日程度早い11月10日前後に行った。栽培様式は畦立4条播(畦幅150cm, 条間25cm, 播幅10cm)で播種量は0.5 kg/aとした。1区面積は7.5m², で1区制で以下の施肥を実施した。

試験区	窒素施用量(kg/a)			
	基肥	追肥Ⅰ (1月下旬)	追肥Ⅱ (2月下旬)	追肥Ⅲ (出穂後10日目)
1(標)	0.5	0.2	0.02	0, 0.1, 0.2, 0.3
2	0.5	0.2	0.02	0, 0.1, 0.2, 0.3
3	0.5	0.2	0.02	0, 0.1, 0.2, 0.3
4	0.5	0.2	0.02	0, 0.1, 0.2, 0.3
5	0.5	0.2	0.02	0, 0.1, 0.2, 0.3
6	0	0	0.02	0, 0.1, 0.2, 0.3

【結果及び考察】

11月中旬に水稻後小麦「チクゴイズミ」を早播した場合の施肥体系は、10a当たり窒素成分で基肥5kg-分けつ肥1月下旬2kgの施用した場合、2月下旬の追肥を窒素成分で10a当たり2kg施用することで、穂数及び収量が確保された(図1)。

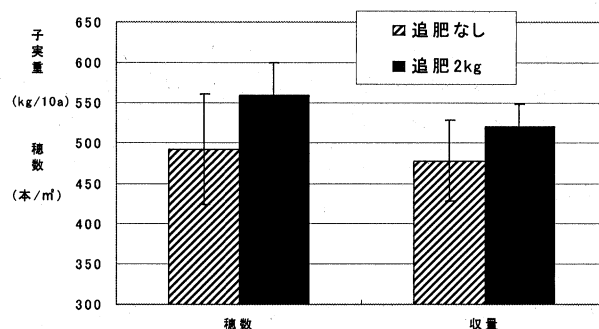


図1 2月下旬の追肥が穂数及び収量に及ぼす影響(早播チクゴイズミ H17,18産)

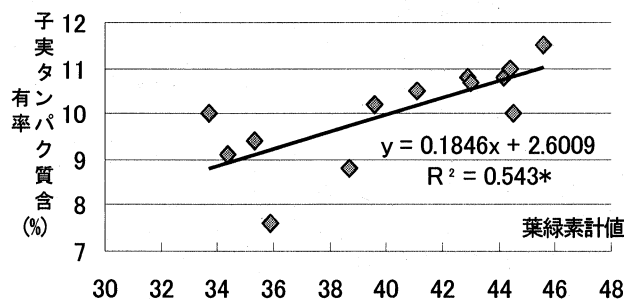


図3 出穂直前の止葉の葉緑素計値と子実タンパク質含有率(出穂期追肥なし)(H16,17,18産)

また、この場合、出穂期直前の葉緑素計値は39~41となり、出穂後10日目に窒素成分で10a当たり1~2kg施用することで、子実タンパク質含有率を適正値の10~11%とすることができた(図2)。さらに出穂直前の葉色が42以上の場合は、出穂後の追肥の必要はないと推察された(図3)。また、葉緑素計値での葉色は、25個体の止葉測定で判定できることが判った(図4)。

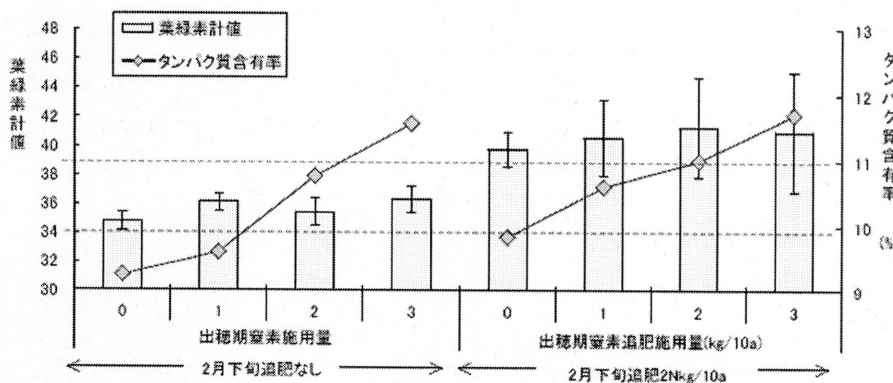


図2 止葉の葉緑素計値とタンパク質含有率(H16, 17, 18)

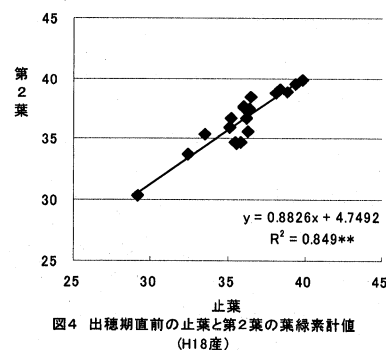


図4 出穂期直前の止葉と第2葉の葉緑素計値(H18産)